

「よそ者」が生み出す相互作用を求めて

岩井雪乃（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター客員講師

NPO 法人アフリック・アフリカ代表理事）

フィールドワーカーとして地域に入って調査するとき、現地の人びとが抱える「問題」に直面するのは避けられないことだろう。日本で暮らす私たちもさまざまな問題を抱えて生活しているように、世界中どこの地域でも、それぞれに「問題」は生起している。現地の「問題」に対して私たちはどのような立場に立つのか、そこにどのように関わるのか。発表者自身も悩みながら、時には研究者として、時にはNPOやワークキャンプ（合宿型ボランティア活動）主催者として関わってきた。本発表では、自己体験を事例としながら、研究にとどまらない複合的な現地との関わりの可能性を提示したい。

フィールドは、タンザニアのセレンゲティ国立公園に隣接する村落である。この地域の人びとは農耕、牧畜とともに狩猟を組みあわせて生態環境に適応した暮らしをおくっていた。しかし、植民地期に自然保護区の制度が導入されてからは、狩猟は禁止され、厳しい取締りが実施されている。80年代は村と公園の関係は敵対的だったが、90年代からは「住民参加型野生動物保全政策」に転換した影響で、公園の存在は村人に受け入れられるようになった。21世紀に入ってからは、観光ホテルによる移住の圧力や、公園から出てくる野生ゾウによる農作物被害など、公園の存在が村人の生活を脅かす状況が再び生まれている。

調査を始めた90年代半ばは、村人はトップダウンに進められる自然保護政策に不満を抱きつつも、あきらめているように見えた。そこで注目したのは、違法ながらも続けられている狩猟活動だった。村人と環境（野生動物）とのかかわりを掘り起こすこの手法は、「生活者の視点から環境をとらえ、そこから政策論をたてる」という環境社会学における生活環境主義の立場に通じている。

その一方で、このような研究成果は、実際に人びとの暮らしの変革にはつながりにくい。そこにもどかしさを感じていたところ、設立するにいたったのがNPO法人アフリック・アフリカであり、また、就職したのが現場への働きかけを志向する早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）であった。WAVOCでは、アフリックで奨学金を支給した村の若者をカウンターパートとして現地プロジェクトを運営し、ワークキャンプやサービスマーケティング（社会貢献体験学習）の手法で、実体験の少ない近年の学部生の教育を実施している。この活動は、金と物を投入するタイプの援助とはまったく異なるレベルで、現地とのかかわりを生みだしている。

研究者は、外部からの介入やそれに対する住民の思いを、普遍的な枠組みで分析し位置づける役割をもつ。それに対して、ボランティアやNGOは地域変革に積極的に関与することになる。ひとりの個人が異なる立場から地域に関わることで、現地との相互作用はさらに深まるはずである。